

しぐさ

中澤均:八王子市内でワクトツキジグモを発見
山本一幸:オオヒメグモの網に居たアカイソウ
ロウグモ

池田博明:こどもクモ博士という試み

池田博明:母グモはもっとも新しい卵のうのそ
ばにいる

浅間茂:コケオニグモと紫外線

入江照雄:熊本県産クモ類目録の追加

笹岡文雄:伊豆諸島・式根島における地中性ク
モ類及びその他のクモ

須黒達巳:長崎県壱岐島のクモ

Kishidaia 1号~100号総目次

入会申し込み

〒186-0002 国立市東3-11-18-201

(有)エコシス

初芝伸吾 (事務局)

Tel 042-501-2651

E-mail:hatsushiba-ecosys@h8.dion.ne.jp

会費 年3800円(学生 2000円)

東京クモゼミ

毎月1回,第1土曜日に千葉縣市川市の加藤
宅で開催.会費などなく誰でも参加できる.

連絡先 新海 明 042-679-3728

または,加藤輝代子 047-373-3344

関西クモゼミ

会費などなく誰でも参加できる.

連絡先 吉田 真 077-561-2660

メーリングリスト「クモネット」

会費などなく誰でも参加できる.入会の申し込
みは谷川明男まで e-mail で.

dp7a-tnkw@j.asahi-net.or.jp

言いたい!聞きたい!



ハエトリグモの論文再読(9)

タイプ標本の再記載

池田博明

ボルネオ島のハエトリの記載

2012年8月にボルネオ島を旅した.神奈川県高等学校理科部会生物研修委員会の海外研修に参加したのである.私の目的は,アメリカのハエトリグモ分類学者,ペッカム夫妻の「ボルネオのハエトリ」(Peckham & Peckham 1907)に出ているクモを見つけることであった.この大論文には42種が新種記載されているが一枚も図が無い.いまでは図の無い記載論文は考えられないが,以前は分類学者が種を同定するには,タイプ標本を見れば一目瞭然だから,記載では図が不可欠のものとは考えられなかったのである.じっさいのところ,ペッカムの記載した種はハーバード大学の比較博物館に所蔵されていて,タイプ標本を見るのは決して不可能ではない.例えば,アリグモ属 *Myrmarachne* の2種(*M. shelfordii* と *M. borneensis*) は山崎健史氏によって最近,再記載されている(Yamasaki 2010).42種のうち15種は,ブルシンスキーやザブカ,ワンレスといった研究者によって検討・再記載されて,分かるようになった.けれども,残る27種は認知されていないし,当然ながら所属なども検討されていない状態である.ペッカムの記載した種がサラワク州に偏っているのはサラ

ワク博物館のキュレーター、シェルフオードが収集した標本だったからである。

1907年当時のボルネオ島は現在とはまったく文明の異なる島であった。日本の約2倍の面積をもつボルネオ島のハエトリグモ相は42種どころではないだろう。つまり、現在のボルネオでいくらクモを採取したところで、ペッカムの記載した種のタイプ標本を検討することなく同定することはできないということである。オランウータンの研究者ビルゲ・ガルディカスは彼女がボルネオ島に入った1971年当時を「道路も、電気も、定期的な郵便や雑誌も、電話もテレビも、ホテルも河川の上バスも、国立公園も存在しなかった」「ボルネオの大半は孤立し、人々は伝統的な生活を営んでいた」と記している。それだけに野生豊かな島だっただろうから、類似した種もいて当然なのだ。

ハエトリグモの再記載に取り組む

ハエトリグモの再記載に取り組んだ学者は少なくない。例えば、シモンが記載した南米の種の多くをアルゼンチンのブエノス・アイレスの自然博物館のマリア・エレナ・ガリアーノ(1928–2000)が再記載した。彼女の最初の論文は29歳。彼女がシモンの南米の標本を再記載したのは1963年だから彼女は35歳、200ページ近くもある大論文はおそらく彼女の学位論文だろう。その後、彼女は72歳まで南米のハエトリグモの分類を一手に手がけることとなった。ガリアーノの論文の多くはブエノス・アイレスの博物館紀要に発表されており、この紀要論文は日本では入手できないのだった(現在、図だけはプルシンスキーのネット上の「世界のハエトリ」で参照できる)。私は2001年に南米のエクアドルの生物研修旅行

に参加する予定で、採集したハエトリグモを文通のあるガリアーノに同定を依頼するつもりでいた。ところが、彼女は2000年10月30日に交通事故で突然亡くなってしまったのである。直前に彼女は心よく私が必要とする論文の郵送を申し出てくれていたのだが、あまりに膨大な量なので遠慮しているうちに、急死してしまったのである。人間、明日はなにが起るか分からないものなのだ。

タイプ標本の再記載を主な仕事として積極的に取り組んだのは、なんとといってもポーランドのジャージー・ブルシンスキーである。彼は1966年ごろからポーランドの動物学雑誌にハエトリグモのタイプ標本の再記載の論文を発表。1971年には世界の主要な博物館に所蔵されているタイプ標本のカタログを発表した。ボネとレーヴァーのカタログを参考に種名で整理したカタログだが、パソコンやインターネットのない時代に大変な作業だったと思われる。1976年には260ページの「旧北区・新北区のハエトリグモの分類学及び地理学的研究」で第二学位を取得。第311図から第450図までの140枚がブルシンスキーの原図であった(第1図から第310図は他の文献からの引用図である)。1984年にあまり知られていない種を中心にした170図以上のアトラスを刊行、1987年にはその第2部を出した。そして1990年にまとめた366ページのカタログが現在のネット上の2007年版の「世界のハエトリグモのモノグラフ Monograph of the Salticidae (Araneae) of the World」の原型となっている。

プルシンスキーの力わざのお蔭で闇のなかで手探りするような状態だったハエトリグモの分類に光明が指したのである。プルシンスキーのカタログはウェイン・マディソンの協力で

ネット上にオープンにされ、いまや世界じゅうの人々に参照されている。

しかし、プルシンスキーのモノグラフは生殖器の図が中心で全形図が出ていない種が多い。私見では再記載には全形図を必ず付すべきである。デジタル・カメラで撮影した全形図でもよい場合もある。再記載は同定のために真に役立つ資料でなければ意味がないからである。

ベッカムの記載した種の正体を考察する

今回 2012 年に観察したハエトリで同定できたのは 15 種だけだが、そのうち「ボルネオのハエトリ」に記載されたと推察可能な候補種は 3 種だけだった。ただし、前述したように確実な同定にはタイプ標本と見比べる必要があると思っている。

ベッカムはシモンの分類にしたがって後牙堤歯数で大きく多歯・裂歯・単歯に分けてから記述しているが、今回の 3 種はすべて単歯だった。この後牙堤歯数によるハエトリグモの大分類は人為分類として批判を受けた時期もあったが、最近はある程度系統を反映した分類だったと再評価されている (Maddison & Hedin 2003)。

ノーマ・ラシッドとリーはマレーシアのクモのチェックリストを公表しているが、このリストはボルネオ島を無視していないにもかかわらず、ベッカムの論文の種をチェックしていない (Norma-Rashid & Li 2009)。正体不明種が多いため、これもひとつの見識である。以下、和名は仮称である。

(1) 大形サイズのハエトリ (10mm 以上)。
デカハエトリ (仮称) *Hyllus pulcherrimus* Peckham & Peckham 1907. 11mm male and 14.5mm female. デカハエトリ属 (仮称) *Hyllus* はマリアウ・ベイシン地域のガジ



ヤ河 (ガジャは象を意味する) の河川敷で 1 雄成体が発見された。既知の種の触肢で探索すると、*Hyllus lacertosus* (C. L. KOCH 1846) と同定できる。プルシンスキーが再記載したのはジャワ島の標本である。ボルネオ産は RTA の先端の歯型が明瞭な点でやや異なる。*H. lacertosus* はベトナムからジャワ島、スマトラ島、ピンタン島から報告されている。コッホは *Plexippus* 属として記載し、その後、トレルは 1892 年の『マレーシアからパプア・ニューギニアの研究』にボルネオ産の *Plexippus lacertosus borneensis* を報告している。トレルの記載はラテン語で、しかも図が無いが、コッホの記載した種とやや違いがあるため亜種と判断したと思われる。ところで、ベッカム夫妻が新種とした *Hyllus pulcherrimus* の記載を読むと、今回の発見個体に当てはまる点が多い。つまり、コッホの記載した種と同種らしいということである。ベッカムの記載でもっとも重要な点は腹部背面が鮮やかなメタリックな緑色であるという点である。実際には緑色というより金色だが、金色はメタリック・グリーンと表現されることが多い。

(2) 中形サイズ (5mm 以上, 10mm 未満) のハエトリ。ナミダアトハエトリ (仮称)



Bathippus shelfordii Peckham & Peckham 1907. 8mm male described by Zabka. ナミダアトハエトリグモ属(仮称) *Bathippus* の一種をマリアウ・ベイシン地域のガジャ河の河川敷で観察した。体長約 8mm のメスであった。ペッカムがこの学名で記載したのはオスだが、メスの斑紋は基本的にはオスと同様である。ザブカがオスと同時に記載したメスと外雌器の構造が一致した。この個体は腹背の黒点が少し大きくつながっている箇所がある点で、ザブカの記載したメス個体とやや異なるが、斑紋の個体変異と思われる。マレーシアのチェックリストには本種は載っておらず、ナミダアトハエトリグモ属は別の 2 種が挙げられている (Norma-Rashid & Li 2009) が、オスだけが記載されている *B. pahang* Zhang, Song & Li 2003 とは本種は異なる。オスだけが記載されている *B. schalleri* Simon 1902 には図が無い。

Bathippus serenus Peckham & Peckham 1907. 6.7mm female described by Zabka. 本種は *Bathippus shelfordii* のメスであった。

(3) 中形サイズのアトリ。ワカバアトリ(仮称) *Epeus mirus* (Peckham & Peckham 1907). 7mm female from Sarawak described by Proszynski. ワカバ



アトリグモ属(仮称) *Epeus* はマリアウ・ベイシン地域とタンブナン村の両方で観察された。写真は葉裏で卵をガードしているメスである。卵に糸をかけずにガードしている様子はたいへん珍しい生態である。本種はトレルが 1887 年に *Viciria* 属としてメスを記載した *Epeus alboguttatus* (Thorell 1887) と同定できた。ペッカムは *mirus* を新属の *Taupoa* 属として記載したが、特異な外雌器からはトレルの記載した種と同種の可能性がある。マレーシアのチェックリストには、ワカバアトリグモ属は別の 2 種、*E. flavobilineatus* (Doleschall 1859) と、*E. glorius* Zabka 1985 が載っている。

謝辞

トレル及びノーマ・ラシッドの文献は谷川明男博士に見せていただきました。記して感謝します。

参考文献

- Galiano M. E. 1963. Las especies americanas de arañas de la familia Salticidae, descritas por Eugene Simon. Redescripciones basadas en los ejemplares típicos. Physis, Buenos Aires, 23(66): 273-470. [見ていない]
- Norma-Rashid, Y. & Li, D. 2009. A

checklist of spiders (Arachnida: Araneae) from Peninsular Malaysia inclusive of twenty new records. Raffles Bul. Zool., 57:305-322.

Maddison, W. P. & M. C. Hedin 2003. Jumping spider phylogeny. Invertebrate Systematics, 17, 529-549.

Peckham, G. W. and E. G. Peckham. 1907. The Attidae of Borneo. Transactions of the Wisconsin Academy of Sciences, Arts, and Letters 15: 603-653.

Proszynski J. 1984. Atlas rysunkow diagnostycznych mniej znanych Salticidae. Zeszyty Naukowe WSRP, Siedlce, f 1-177.

Proszynski J. 1987. Atlas rysunkow diagnostycznych mniej znanych Salticidae. Zeszyty Naukowe WSRP, Siedlce, 1-172, f 1-172 (pp=ff).

Proszynski J. 1990. Catalogue of Salticidae (Araneae) a synthesis of quotations in the world literature since 1940 with basic taxonomic data since 1758. WSRP, Siedlce, 366 pp.

Proszynski, J. 2007. Monograph of the Salticidae of the World. On Internet URL:<http://salticidae.org/salticid/main.htm>

Thorell, T. 1892. Studi sui Ragni Malesi e Papuani. IV, 2. Ann. Mus. civ. stor. nat. Genova, 31: 1-490.

Yamasaki, T., 2010. Redescription of two Bornean species of the genus Myrmarachne (Araneae: Salticidae). Acta arachnologica, 59(2):63-66.

ガルディカス, 1995 (訳書 1999). オランウータンと共に.新曜社.

池田勇介君を偲ぶ

谷川明男

2012年4月29日,池田勇介君が急逝されました.あまりに突然の,あまりに早すぎる旅立ちでした.彼は大阪府のクモ相の研究をはじめ,いろいろな研究でたくさんの賞を獲得していますが,ここでは,彼にまつわる私の個人的な思い出について書かせていただきたいと思います.

私が池田勇介君と初めて会ったのは2001年12月の関西クモ研究会例会の時でした.それまでに,関西クモ研究会の方々からは,とても小さいのにクモに関して深い知識を持っている子がいるという話を聞いていただけで,直接会ったことはありませんでした.まだそのころは小学校に入ったばかりのころではなかったかと思いますが,その日の彼はスパイダーマンの恰好をしていました(写真1).それが勇



写真1.初めて出会ったころの池田勇介君